

F2-8

住宅街の秩序の小さな崩壊のデザインについて ありのままの生命活動を受け入れる街へ

About the design of a small disruption of order in a residential area
Towards a city that accepts life activities as they are

松井良太¹, ○佐藤信治²
Ryota Matsui¹, Shinji Sato²

People gather in the process of snuggling up to the cat. Admiring cats creates communication, and taking care of cats creates a loose community in the city.

Instead of creating order, by slightly disrupting order, a blank space is created in the city where people gather. Adapting to the shaken order, a new order is born. The city where this is repeated shines dynamically like life.

1. 所有による分断

かつてのモノ不足の時代では、共有を通して、人々の時間の交わりがあった。しかし、現代ではモノが豊かな時代となり、共有を行う必要がなくなった。所有する時代は、個人間で完結してしまう貧しさがある。

現在の住宅は縁側や土間といった住宅の他者を受け入れる空間は消失し、真直ぐな壁で構成される。住宅と住宅の間には塀が張り巡らされており。それらが立ち並んでいる住宅街は所有による分断がなされている。生活する人々はつながりが乏しく、街は公共が機能していない。



図1.千葉県船橋市坪井町の住宅街の様子(参照:[Google Earth](https://www.google.com/maps/@35.6811111,139.7811111,15z))

千葉県船橋市坪井町は、日本大学船橋キャンパスが近くにあり、住宅街は一軒家の一部を寮として学生にを貸し出す学生寮の運営を行う住宅がたくさんあった。それにより、この街は大学生と地元の人々が様々なものを共有して、密接に関わり合っていた。しかし、現代に進むにつれて、学生アパートの建設が増え、学生は個人の空間を所有することにより、地元の人々との交流は皆無になった。一人暮らしを始める学生たちは街で孤立している。

2. 分断の小さな崩壊のデザイン

この問題に対して、千葉県船橋市坪井町の一角に猫の隠れ家を設計する。この街では猫が空き地や住宅と住宅の隙間を拠点にしながら、ひっそりと暮らしている。船橋市は街の猫への餌やりをやめるよう勧告していて、猫は街の裏側の存在となっているが、ここでの生活が成り立つということは、街の人々からこっそりと餌をもらっている。

街の一角猫の家を設計することにより、建築のシンボル性をもって、街でこっそりと行われた営みを街の公式の営みへと昇格する。

猫の家には人が立ち入れない領域とその周りに人との接点を持てる空間を設計する。これにより、街には猫の世話をする習慣、秩序が生まれる。

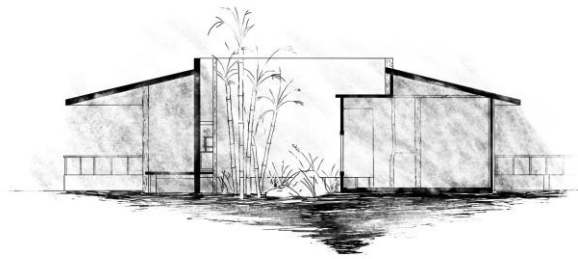


図2.猫の家の断面図

3. 街の秩序の小さな崩壊

猫の家が街の一角にできると、街には猫の世話をする習慣、秩序ができる。建築によって、猫の世話をする行為が町全体の営みとなる。

そして、猫は家を生活の拠点にしながらも、敷地を飛び出し、道路に寝転んだり、塀を横断したりする。そうして、街の秩序は小さく崩壊し始め、その秩序が揺らいだところに寄り添うように人々がそこに集まる。道路に寝転ぶ猫と一緒に居座ったり、塀を横断する猫によって、庭には常に予感が流れる。猫との資源共有を介して、所有による分断の意識が和らぐ。

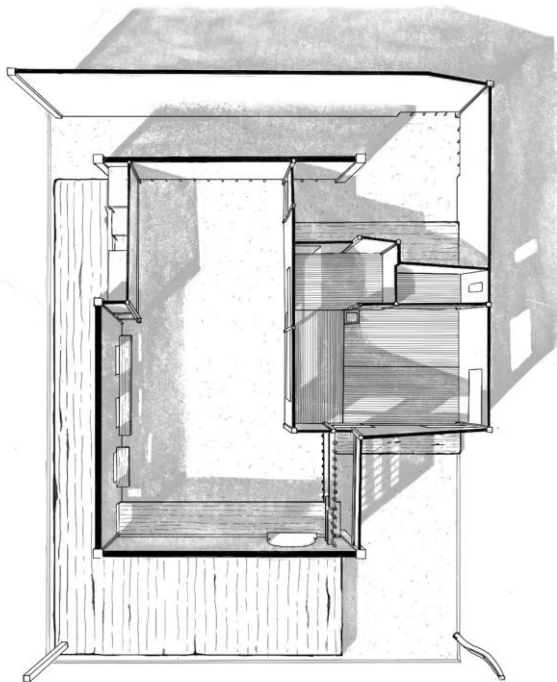


図3.猫の家の平面図

1 : CST,Nihon-U 2 : CST,Nihon-U

4. 猫を介する人とのつながり

猫に寄り添う過程で人々が集まる。猫を愛でることによって、コミュニケーションが生まれたり、猫の世話をすることによって、街のゆるやかコミュニティになったり、様々な予感をはらんでいる。

秩序を生み出すことではなく、秩序を小さく揺るがすことにより、街に余白が生まれ、そこに人々が集う。揺らいだ秩序に適応して、さらに新たな秩序が生まれる。これが繰り返される街は、生命のように、動的に輝ける。